

春植込む球根類

原 秀 雄

雪がとけると、黒土のあらわれた所からいろいろの草が芽を出し、雪の下に冬のうらみもれていた小さな灌木にも花が咲き、また芽が出て来る。早春まだ雪の深く残る三月の末近く、高い梢に黄色な花粉を南東の風に乗せて人知れず咲き出るハンノキの花、その頃になるとすでにエゾニワトコやウワミズザクラ類の新芽も青く伸び初め、雪も深く寒さもきびしい冬のさなかから少しずつ芽鱗の衣をぬぎそめたヤマネコヤナギの暖かそうな毛深い花穂も、まだ蕾ながら半身をぬつと鱗外に現わし、これにならうかのように川原のヤナギたちも、猫のようなまた狗のようなもくもくと毛をはやした蕾を枝にならべる。やがて雪も漸く山の上、谷のはざま物かげへと去つて行くにつれて、山野には先ずナニワズが黄色の、フクジュソウが黄金色の、ウラベニイチゲが裏べにの白い花を、ミズバショウが白い、エゾリュウキンカが黄色の花をそれぞれに咲き、それが一めぐりしてエゾムラサキツツシが開き、キバナノアマナ、タンポポと咲きつづいて、エゾヤマザクラが笑えば春は正にたけなわである。一方庭ではフクジュソウと前後してハナサフラン、つづいてラ

ッパズイセン、スノードロップ、ヒュウガミズキ、トサミズキ、レンギョウ、モクレン、更にヒアシンス、シラ、キオノドクサ、ムスカリと咲きすすむ。このように春花を咲く植物の花芽は、前の年からのおのの植物に用意されており、春花が開く前、少なくとも前の年の中に根が十分に張つていなければならない。球根類も例外ではなく、前の年の秋のうちに植込で十分に根を張らせておかぬと、春十分に美しい花を約束してはくれぬものである。よく春になつてヒアシンスやチューリップを植付けたいとせがむ人があるが、そのような人にはこれからならば、いろいろの春植える球根類を植えるようにとすすめている。

さて春植込むことのできる球根類としてはどのような植物を挙げられようか。それにはまずダリア、カンナ、グラジオラスがその大宗であるが、これ等に就てはしばしば本誌にも書かれていり、自分もダリアについて記したことがあるので、これらはすべて略し、余り一般には作られておらぬが風変わりな春植の球根類を二、三あげて解説してみることとした。

アピオス これはマメ科の蔓性多年草で、茎でからみついて上昇する。これには日

本にも一種、自生のものがあつて、南面する林縁などに生じ、一丈半ぐらゐの高さにまで伸び、長さ二〜三丈で三〜七枚の小葉からなる羽状の葉を互生し、夏長さ五〜一〇センチのほそい総状に小さな蝶形花をつけ、花の色は緑黄色で紅紫の暈しを呈する。一つの花は長さ六〜七センチである。その名をホドまたはホドイモと言つて地下に球形の塊根があり、外皮は黄褐色で肉は白く、これを採て食べることができ、古くから救荒植物の一つとなつてゐる。ホドは塊のことで、塊根のあることからおきた名であり、ホドイモは塊手の意である。種子の他地下の塊根によつても繁殖する。九子羊、山紅豆花と云つた漢名まである。庭に植えてもちよつと面白いが、ここに挙げようといふのは北米原産の種類で、アメリカホドまたはアメリカホドイモとよばれる種類である。葉は二〜四対に伸び、五〜七片の小葉をもつ羽状葉は長さ七・五センチ、花は夏に褐紫赤色、もう少し端的に表現すると稍チョコレート色の蝶形花を花房に密につけ、花房の長さは二〜三センチで、日本のホドより一個ずつの花は大きい。穂は短く太く、その上スミレに似た香りがある。ワイルド・ピーンの英名があり、またグラランド・ナット、ポテト・ピーンの名もあつて、これは地下の塊根からでた名で、塊根は洋梨形、日本のホドの塊根と同じく食べることができ、この植物は一六四〇年というから、十七世紀の中頃ヨーロッパに伝えられたが、我が国には明治の中頃に渡来した。寒さにも強く、先年私の庭先に植はなしのまま五年は

ど留守にして、また元の家に去年の夏帰つて来たら、種子から育てたままにしておいたハマナスなどと共にこのアピオスがきれいに花を咲いて待つていてくれた。アピオスは軽い壤土で硝石灰質を含む所がよいと言われているが、余り土にえり好みはないようである。育苗は塊根の分植によつてなされるが、一個の塊根を何個かに切り分けてもよい。切口には木灰や石灰などを塗つておく。また実生も行なえる。竹などの簡単な支柱を立ててからませる。塊根の植付けは春四月末から五月頃が最もよい。

アルプカ ユリ科の草本で、タマネギ或はアマリリスのような、それでいて鱗片の厚さの稍厚い感じのする鱗茎をもつ植物で、熱帯アフリカからアラビアに一二〇種ほど自生するといふが、今日本で普通に作られている種類は、アフリカ南部のナタール地方でネルソン氏により発見されたアルプカ・ネルソニーという種類である。これは一八七〇年代に発見されて英国に送られ、一八八〇年に英国で初めて花を開いたといふが、日本には明治の末頃に送られた。数年前から春の札幌の年中行事の一つになつてゐる大通の園芸市などにも顔をみせる様になつた。余りよく普及した球根類とはいへぬが、さりとて箱入り娘的な存在でもない。この植物は高さ一〜一・五尺になり、葉は先のとがった披針形で基部は溝のようになり、長い花茎を抽いて穂のようにな多数の花をつける。花には五〜六センチの花梗があり、その先に長さ三センチの花を開くが、一見半開き状をなし、純白で花被

の中肋に赤褐色のすじを染めるが、光の足らぬ場所に栽植すると、この筋のないことがある。アフリカ南部原産の植物とはいえ寒さには割合に丈夫で、五月ははじめ頃庭など戸外に植付けておけば八月頃に開花する。秋には掘上げて屋内に鋸屑などと共に箱づめとして凍らぬように貯えておく。また春茎一八〜二〇センチの鉢に肥土で植付け、はじめ室内で管理して、五月中下旬に戸外に出して培養し秋にはそのまま室内に取り入れてもよい。この場合、水を切りかつ凍らせぬことが肝要である。翌春取出して分球し、直ちに鉢に植付ける。繁殖は春植付の時の分球によるのが普通である。このアルプカを俗にアルパカなどというところようだが、訛つたものとはいえずとんでもない名である。

チューペローズ ゲッカコウ(月下香)の和名があるヒガンバナ科の草本、地下に塊茎があつて、それから幅一・二センチ三〇〜四五センチで広線形の先のとがつた根出葉六〜九枚を出し、その中心から茎がのび、これにも同じような形の茎葉八〜一二枚をつける。茎の上部の葉ほど小さい。この茎は丈が〇・五〜一センチくらいとなり、その頂に夏白く芳香があり、花被の外面に稍赤味をおびて花を二個ずつ対生して、まばらな穂状につける。花は長さ六センチくらいで、花の基の筒部は二・五〜三・五センチである。この花は昼よりも夜の方が香りが高く、夜来香の名があり、台湾では月下香、中国では晚香玉というが、古い和名にナフトール、ナクトール(物品識名) シッカタライゼン、オランダズイセンがある。メキシコの原産といわれる

が、現地には野生種を見ないということである。ヨーロッパには一六二九年移されたが、日本にもかなり古くからつたえられた植物で、すでに飯沼慾齋の草木図説にはかなり詳しい記載があり、おそらく寛政年代、またはそれより前に渡来したのではないかと思われる。この花は芳香が相当に高く、香水の原料植物として栽培されることがある。花はもともと一重咲であるが、八重咲のものもある。八重咲品種にも重ねの厚薄があつて、普通プロレ・プレノといっている品よりパールという品種の方が重ねが厚く大輪で、色も純白であり、花穂は稍短かいが花つきは密である。草丈は七五〜八〇センチとなる。また八重咲のものにドワーフ・パールとよぶ矮性系、トール・ダブルとよぶ丈が高いものなどがあつて、前者は鉢植に後者は切花用に適する。また稀に葉に白い斑の入つた品種も作られることがある。

チューペローズは日当りのよい土地を好み、土は稍かるい砂質壤土によい生育をする。植付けは五月中旬から行なうが、その前によく腐熟した堆肥や油粕、米糠あるいは過燐酸石灰などを土によくすきこんでおく。油粕や米糠などを用いるとすれば、植付けの二週間以上前からこれ等を施すようにする。また春先早く二〜三月頃から、径一五センチの鉢に肥えた、その上排水のよい土で植付け、室内又温室があれば割合低温な場所に入れて早く発芽生育させておき、六月のはじめ頃庭などにおろすと花を早めることができる。本邦では八丈島その他の暖地でこの球根(塊茎)の生産が行なわれ、全国に売られている。関東地方南部あたり

までは冬でも戸外に植えたままで越冬可能であるが、植放しでは花つきが悪くなつてくるといわれている。もとより北海道では秋九月末か十月はじめには掘り上げて鋸屑などで包み凍らぬように貯える。この植物の塊茎は生育中多数の小塊茎を分球するが、その中調子のよいものは秋までに次々と開花することがある。春植付け前に分球を行なうが、植付けの時前年の子塊茎を外さないで植付けると、葉ばかり茂つて開花しないことがあるから、開花させるものは肥つた塊茎を一つだけにして植付け、小球もやはり一個ずつにして肥培すれば、開花球を得ることが出来る。一重咲のものは割合よく花をつけるが、八重咲の品種では、一度花をつけた球根には次年に花をつけなくなるものができ易い傾があるので、子球を毎年肥培して開花球を育成することが必要である。

ティグリア アヤメ科の植物で、メキシコ、ペルー、グアテマラ、チリなどに凡そ二〜三種自生するが、現今本邦に栽植を見るのは、ティグリア・パウオニアというメキシコ、グアテマラあたりに原産の種類で、和名をトラユリまたはトラフユリという。地下の鱗茎は直径三〜四センチ一鱗茎から時に数本の地上茎を直立し、高さ四〇〜八〇センチとなり、一茎に花一〜四個を漸開する。この花は形が大きく、径七〜一五センチ及び、六枚の花蓋片(花弁)及び萼片に当る部分)のうち外の三片は基部が歪状で紫色、黄と紫赤との条斑があり、なかばから先にかけては赤くつやがある。また内側の六片は形が小さく黄色で、紫紅の斑点が

ある。花は八月中頃から九月にかけて早朝に開き、午すぎにはしほみ、いわゆる一日花であるが、次々に咲くのでかなり楽しめる。一八世紀の末にヨーロッパに伝えられたというが、日本には明治の末頃に渡来した。ティグリアという俗名。トラユリ、トラフユリの和名、タイガー・フラワールという英名は、いずれも花の内部の斑紋を虎斑に見立てての名である。園芸品種も相当にあつて、花が白く基部に洋紅の斑のあるアルパ、藤色のリラケア一名ルビー・クキン、黄色で斑紋の紫のコンキフロラ、花が大輪なスベキオーサなどとりどりである。

ティグリアは腐植質のゆたかな砂質壤土を好むから、腐熟堆肥を十分に施して土をよくおこし植床を用意し、五月中下旬に植付ける。株間二〜三センチの頂から五センチが適当である。または二月上旬〜三月上旬に、二〜一五センチの鉢に一球ずつ植付けて、室内または五〜一〇度Cぐらいの余り温度の高くない温室に入れて催芽し、後六月上旬に戸外に鉢から抜いて植付けてもよい。秋には十月中旬頃までに掘上げ、土のついたまま通気をよくして乾かし、凍らさぬようにして保存し、植付け前に取出して一球ずつに分け、大球を觀賞に向け、小球は別に植付けて肥培する。ティグリアは夏涼しく保つことが必要で、夏の蒸暑い天候のもとではなかなかよい生育をのぞめない。北海道では冬凍らせないようにできさえすれば、返つて関東地方におけるよりも培養し易いといえよう。